



# ネパール・ミカの会

平成14年新年号 NO.16 01.15発行

ネパール・ミカの会 事務局 194-0035 町田市忠生2-5-36 こもれび堂内 tel 042-791-0602

## 年頭にあたって

2002.1.10

ネパール・ミカの会  
会長 齋藤謹也

平成14年が始まって、あらためて昨年のネパールの花満都の様子をおもいだしました。従って、国王一族の死去に接しているネパール国民の心情を思う時「おめでとうございます」とはいえない状況であります。

しかし、私共が知っているネパールの友人達は、つとめて冷静を保とうとし、王族内のでき事として必死に心の平衡を保持しているようにみえます。この姿勢は何か無常の悲しみと人々の美しさが融合しているように見え、幻想さえ誘う美しさをもっていていさぎよい清らかにみえるのです。

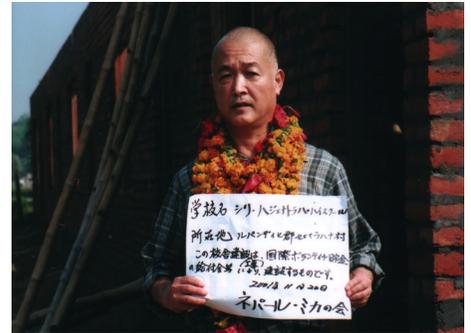
この時、ささやかな、でもおおきな喜びを与えてくれる接触をもつ私達か？ どう対処するかは、大きな課題であると共に私達の人格も試されている事かと思っています。

ネパールの楽器は、現地で聞くと楽しく、実により音であるのに、帰国すると音もなかなかでず、弾き方が分らないまま飾っているのですが、ネパールの真の音を聞くと耳をもちあれせられるよう、平成14年は努めたいものです。

感動を覚えても、その感動をどう表現して返せるか、しっかり考えていく年にしたいものです。

さて、西森さんと結婚したゴヒンダさんからは、「今、町田に来ています」私達がいく所の治安は大丈夫ですよと、昨年暮に聞きました。

少し、勇気も必要かもしれませんが、3月第6次教育支援の旅を行いますので是非ご参加下さい。



## 2001年をふり返って

副会長 坂 育生

ミカの会忘年会に参加できませんでした。きわめて心残りではありましたが、齋藤

会長他、役員、会員の方々の充実ぶりを考えると、何にほどのことかと、自分なりの勤めをすませて納得しました。

去年は、町田の他相模原のボラティアや、NGOのグループと接する機会がずいぶんありました。まさに中国の三国志物語ではありませんが、英雄きら星のごとく魅力的な方々が集まってくれたと思います。

ネパールを愛する人々は、現代の日本社会が見失った、豊かな自然と人間性を忘れる事のできない共通点があると思います。それゆへに、集まれば自然と心がなごみ、マチャプチャレやアンナプルナの美しい山々が目にうかび、レッスンピリリがずさみたくなります。

当初、ミカの会は会長を中心に、まったくフランクで雑多なグループでした。それが市の助成金とかボランティア貯金を得るために、組織化され、小生もいつしか事務局長とか副会長という役職を拝名しました。これでいいのだろうか？そう感じながらも、ミカの会の発展という流れの中で、今日にいたったと思います。

今回の歳末チャリティに、アフガン難民のヒサール君を招いたコンサートをやりました。私達はネパールを通じて、人間的な視点で今を生きていきたいし、現代を直視すればアフガンを理解するにも、チャリティの成功を果たすたねにもいいチャンスではないかと思いました。（実行委員長の今村先生と販売責任者の沼野さんには御苦勞をおかけしましたが。）そして会長をはじめ、会員の方々自主的に会場作りのため、イスやテントを運んで下さった時に、改めてミカの会の方々の心の広さと素晴らしさが心にしみこみました。小生の働く授産施設が、市から法人化の方向に決定し、ミカの会の活動にますます参加する余裕がなくなるとは思いますが、今後ともよろしく願い致します。



## 中間調査あれこれ

副会長 今村 旭

九月の米国同時多発テロの影響で大方の人は海外に旅する事をためらった。ミカの会の中間調査行は前々から本年度は十一月ごろと日程がほぼ決まっていた。一般的に考えれば不安が無いといえは嘘になる。当然家族は「危ないんじゃない、止めたら」と。たが私自身は相当前から「行くなら秋の中間調査」と心に決めていたので斎藤会長との二人でためらいなく出掛けていった。案ずるより生むが易し。結果は何事も無く予定通りに無事帰ってきた。

11月下旬のカトマンドゥは予想に反してかなり暖かであった。着後の遅い夕食にラムさんとジャンモさんの四人でタメル街のレストランに入った。窓を開け放し夜風が

心地よい。冷たいビールが美味しいこと。ビールが美味しいという事は体調も良いということ。明日からの多忙な毎日を乗りきる英気を十分に蓄え、深夜のタメルの雑踏を久し振りに肌で感じた一時でした。

11月19日

早朝六時にはパシュパティナト、ついでボダナトにお参りをし、すぐ隣のチベット寺院で斎藤会長は朝のお勤めをした。午前中はパタンへ。シャルミラの店に顔を出したが彼女は不在だった。王宮美術館を見学し、中庭のレストランで昼食、このコースは気分転換には上々の場所で皆と来たらもっと楽しい良い所であった。午後の飛行機でバイラワへ。三時前にはバイラワ空港に手配済みの軽ワゴンが待っていた。工夫して大荷物と人間四人を詰め込みルンビニへ向け出発。仕事始めにグルワニマイ小学校を訪問した。相変わらず熱心な校長と面談した。要望事項を協議し、教室に扇風機が欲しいとのことであった。夏場には四十以上にもなるので、電気代は自分達で何とかするので是非実現してやりたいと強く望まれた。子ども達は皆元気で教室から代わる代わる飛び出してきて「ナマステ」を連発していた。



法華ホテルにやっと到着したと思ったら門の前に村人風の一団が集まっていた。実はこれが次年度の計画に係ってくるスンディ村の陳情団だったのでした。沢山の人が多かったが、十九人の代表を中に入れてもらい、要望を聞いた。校長からは教室の不足を訴えられ、教室建設に何とか「近くに学校が次々と建っていく中で今度は私達にも」といつもの様に支援の要請であった。低カストの入学促進や、女子の就学率の向上を目指している等の事情の説明を受けた。明日までに色々整理して、文書を提出して下さいと伝え、やっと解散してもらった。申し出は簡単だが、受ける方は又帰国してから新たな事業計画に入れなければならない、先のことを考えると本当に疲れる事でやれやれでした。

11月20日

マホマディア小学校訪問。学校が二つに分かれたため在籍者が少なくなり、特に当日はラマダン中なので25人しか出席して居らず、かつての熱気はなく寂しい限り。希望事項は教室の床の改修であった。

シリ・アディアリ小学校訪問。  
当年度の建設進行中のせいか活気充分。レンガ積みが軒まで進み、水をかけて養生中だった。工事現場の裏の畑では見なれた野外授業が始まって居り、来年春には新築の教室に入れるでしょう。  
ハジエナヤナトラハハイス쿨訪問。



ここも進行中で現場の赤いレンガが眩しい。教室に入れな一年生から三年生迄が野外で授業中。我々も校庭の木陰で学校当局者との野外会談を催し、校舎完成を目指して話し合いを行った。特に問題は無かった。

マズワニ村保健センター。

屋根部分まで工事が進行していた。建物の完成後の運営については、保健婦の人件費等の問題で、現段階では不確定な要素が多い。

シリ・マズワニ中学校訪問。

校舎完成後1年目で45名の在籍者があり、女子が20名で、女子の就学率が良い事が目標としていた事と一致しており嬉しいことであった。

シリ・マズワニ小学校訪問。

一年生から五年生まで335名が在籍。まだ一部が野外授業をして居り教室は相変わらず不足しているとの事だった。

スンディ小学校訪問。

前日の突然の陳情団の件もあり、学校関係者多数が集まっていた。372名の在籍者であるがなるほど野外授業の児童も数多く感じられた。

昨夜の宿題とした文章も、すぐに完成し整理してあり、図面も含めて会長に手渡された。手ぐすねひいて待っていたの

か、やる事が速い。熱意を示すのに一生懸命の感あり。

シリ・ルンビニ小学校訪問。

236名の在籍者一年生から三年生迄が通学し四年生からはシリ・マズワニ小学校

の方へ通学する事になっている。一見したところ、この近くの学校の中で最も貧しい子供が多く居る様に感じた。「給食」を作って居り、校庭で大きな鉄鍋に世界食料計画(WFP)からの援助の小麦粉を入れ、火を通し砂糖を入れダンゴ状にした極めて簡単なもので、50年前の日本を思い出した。

11月21日。

ルンビニを朝八時半出発。タンセンに向う途中、バイラワで身売りされた少女達のためのランジットホームを見学した。インド国境が近いので、身売りされた少女をとり返し、彼女らを更生させるための施設で現在四十名くらいが入所し、自立のための職業訓練がされ、六ヶ月くらいの滞在で社会復帰を目指させるもの。突然の見知らぬ男達の見学で生徒たちは強い警戒心で身構えているので、早々に退去した。

山道も順調にかけ上がり昼前にはタンセンに到着した。早速トリヴァン大学文系校を訪問し図書室を見学し、学長と面談した。午後は市庁舎を訪問し、市長と会見した。短時間であったが、手動ミシンの活用の話も出た。

モホン女子校訪問。

現在420名の在籍者で、教師数一六名でしっかりした学校の印象で図書支援の打ち合せを行った。

11月22日。

午前七時にトリヴァン大学理系校訪問。早朝なのにもう講義が始まって居た。学部

長と校内を見学したが、理系の名ではあるが、実験用器具が本当に貧弱で、何とか改善して充実したものにしてやりたく感じた。九時には町の方に下って行き、市庁舎での写真展の準備をし、関係者の手伝いもあり展示も手ぎわ良く出来た。十一時に市長や学長を来賓に開会式を行った。ラジオ・ネパールやロカル紙等が取材に来て居り、少々驚いた。ラマさんの事前の宣伝が効いて多数の市民が来場してくれ開場と同時に人々がにぎやかに見学してとても盛会であった。

夜は大学関係者や塩屋の家族も交えて食事の会を催し、レストランに二十数名が集まりウィスキーを飲み干す、ネパールの人も結構上戸な人も居り、「酒の効用はネパールも日本も同じ」と言う人が居り、とても和気藹々な良い食事会でした。

11月23日。

タンセンからカトマンドゥへの移動日。

スリナガルホテルから町に下って塩屋の前に差しかかると娘が見送りに出ていてくれた。「旅の安全を」と土産に岩塩をプレゼントしてくれた。父親も上機嫌で別れを告げた。ラダも十四才となったので一段と成長の感あり。バイラワに近づくにつれ霞の様に空がモヤってきた。この時期に特有の現象だそうで、案の定、視界不良で予定通り飛べないとのこと。出発が二時間近く遅れてしまった。カトマンドゥ到着直ちにパドマ・カニヤ女子校を訪問し、雪山童子の会の奨学生十名と面談し斎藤会長より各人にお土産を渡す。午後四時に日本大使館を訪問。家元秘書官と最近のネパール情勢を聞き、又ミカの会の活動の近況を報告した。大使館訪問も予約してあった事も有るが、回を重ねるミカの会の活動の成果か、スムズに行われラマさんを含め三人とも入館が出来、ルートが出来た感じがした。大使館訪問の後、ホッとする間もなくニュロードにとって返し、昨夜のトリヴァン大学の学生会代表との約束での理科実験用具の買いつけに、忙しい事となった。学生二人は最初は遠慮かちに考えこんでいたが、ラマさんの指導よろしく、途中から目を輝かせて、あれこれ選び、手荷物で持てるだけ買いこみ、再びバスセントラに戻ってもらう事となる緊急な出来事であったが、学生等にとって大きなプレゼントとなり、即効性のある支援が出来た。

11月24日。

さあ、いよいよ今日が最終日。深夜のフライト迄時間に色々忙しい。会からの宿題とも言えるバザ用品の仕入が重要な事だ。午前中はバクタプールを散歩した。

国分寺グループの支援校にも行ったが休校日で静かだった。

タメル街に戻り土産用品店を訪ねるが目当ての店がどこも休みで当てが外れた。仕方が無いので代わりに目ぼしいカバンやアクセサリ、マフラ等を出来るだけ買い求め充分ではないが何とか帳じりを合わせた。

夕方迄歩き回りバイシャリホテルにて食事をし、九時に出発準備も整い全ての行動が終わった。ともかくラマさんの全ての行程に配慮が行き届いていた事で安全で無事に帰る事が出来た。いつもながら感謝の気持で機上の人となった。帰りは疲れと安堵感で上海迄ぐっすり眠り込んでとても時間が短かった。以上中間報告の概要を報告させていただきました。

## 年の始めに思うこと

青沼義信

昨年会計を担当して半年、松浦さんのご指導よろしきを得て、5月に購入したノートパソコンを手探りで操作しながら、まだ完全とは言えないまでも、なんとか処理が出来るようになりました。そして、この歳になってもチャレンジすればできるとの思いを強くし、21世紀の初仕事を、初めて使ったパソコンでなしえた事に、いささか満足しております。しかし21世紀



始めの年にしては、国内はもとより地球的にも悲しく大きな事件が多く、社会的には満足できる年ではなかった事が非常に残念でした。その多くに、社会的弱者である子供の不幸がからんでいる事が多く、心が痛みます。国内では、親が自分の子供を虐待し、死にいたらしめた事件。小学校で起こった児童をねらった殺傷事件などなど。海外では学校での銃乱射事件。米国同時多発テロや報復攻撃、それに伴う犠牲者や難民の激増、特に生活力のない子供たちの悲惨さは、目を覆うものがあります。

われらがネパールに於いても、国王はじめ王族の不幸な事件や、いまだに続いているマオイストのテロ行為により数百人の犠牲者がでていと聞きますが、ネパールの人々の政治や生活への不安はさることながら、子供たちに与える影響は計り知れないものがあり、私たちのネパールへの思い入れにより支援してきた行為が、振り出しに戻るのではないかと不安を禁じえません。

このように地球上に住む多くの子供たちのうち、大人たちの身勝手とも言える主義主張の争いのため、学ぶことも出来ず、住むところも無く、飢えや寒さにふるえている子供たちの数ははかり知れません。

反面、不況・不況といいながらも、アフガンの子供たちの悲惨さを報道したすぐあとで、大食い競争を面白おかしく放映する無神経なTV局があるなど、平和ボケとしか云いようのない日本の現象に、恥ずかしさと共に言いようの無い怒りと、同じ地球に生きる者としての不平等さを感じてしまいます。

今年は、このように理不尽な事件が世界中のどこにおいても起こることが無いように祈ると共に、ネパールの次世代を背負っていく子供たちが、自分で考え判断できるように学べる環境づくりの手伝いを続けていくべく、会の活動に積極的に参加しながら、私事として、国内・海外の旅を通じて、人間はもとより、動物・植物や自然の姿に、出来るだけ接する機会をつくりたいと思っています。

## ミカの会に参加して六年

沼野 和子

若いとき「エベレストを見ずに死ぬな」という夢を持っていた。そしてこれまで2回のヒマラヤトレッキングに参加していた。

その後まちだ広報誌上でミカの会を知り、ネパールに小学校を建てようという趣旨に惹かれて発会式に出席した。知り合いは一人もいなかったけれど、何かとても暖かい人たちの集まりという感じがして、即日入会。ラマさんや大谷さんとレッスンピリリの歌まで唄ってしまった。



入会後会員の方たちと二回ネパール行に参加。一回目の1998年にルンビニの小学校を見たとき、これが学校かと唖然とした。煤だらけでガランとした部屋が二つ。黒板も椅子も机も何もない。窓は鉄の棒がはまっているだけ。扉は鉄の重い戸。とても実際に使われている教室とは思えなかった。子どもたちは校庭の土の上に座って私たちを待っていてくれた。汚れた衣服、いつ洗ったかもわからない顔や手足、一様に皆痩せている。学校建設以前にすることがあるのでは、とさえ思った。でもつぶらな瞳はきらきらと輝いて美しかった。

しかし翌年二回目の訪問では、遠くからでもそれと分かる白い校舎、四つの教室と職員室が一つ。窓にはガラスがはまり、扉も鉄ではなく木の扉になっていた。私たちは感激して一つ一つの扉のテープを切った。子どもたちの喜びにあふれた顔、相変わらず純な清らかな瞳。私は大満足で帰ってきた。

ここ二年ほどはつれ合いの病気などで参加できなかったが、参加した方たちの土産話や写真で中学校、小学校と着々と建設は進んでいることがわかる。現地にラマさんという好青年がいて、すべてに渉り面倒を見てもらえることが私たちの活動推進の大きな力になっている。そして「ささやかでも手から手へ」というミカの会の主旨が確実に生かされていることは大変嬉しい。

毎月の例会、各種イベントへの参加、バザーの開催、その他の資金集めなど、さまざまな形での会員の協力が大きな実を結んでいる。こうした多くの方たちの協力こそが会の力となって、すべてのことが運ばれているのを最近つくづく感じている。

老年になって近くでよい仲間巡りあえたことの幸せを感じながら、今年もミカの会の一員であり続けたいと願っている。

## 世界を100人の村に縮小すると

大谷 安宏

地球一周の船旅から帰って間もない、9月末の天声人語を事その他興味深く読んだ。アメリカの中学校の先生が、こんな内容のメールを自分が教えた生徒たちに流した「世界を100人の村に縮小するとどうなるか」というもの。

『その村には57人のアジア人、21人のヨーロッパ人、14人の南北アメリカ人、8人のアフリカ人がいる。70人が有色人種で30人が白人。70人がキリスト教以外の人で、30人がキリスト教。89人が異性愛者で、11人が同性愛者。6人が世界の富の59%を所有し、その6人ともがアメリカ国籍。80人は標準以下の居住環境に住み、50人は栄養失調に苦しみ、1人が瀕死の状態にあり、1人はいま生まれようとしている。さらに1人(そうたった1人)は大学の教育を受け、たった1人だけがコンピューターを所有している。

そのうえで「自分と違う人を理解すること、そのための教育がいかに必要か」を説く。また、「もし冷蔵庫に食料があり、着る服があり、寝る場所があるのなら、あなたは世界の75%の人たちより恵まれています」と。』

以前より一度は体験したいと思っていた地球一周の船旅で、今回訪れた国は21ヶ国であったが、一般のツアーではあまり出掛けることのないまったく趣が異なる

興味深い地を訪ねたが多くの国が大きな幾つもの課題に困窮している現実を目の当たりにすることができた。地球温暖化の影響で海面上昇により水没に怯えるインド洋の珊瑚環礁の共和国。過ってアフリカ最大の奴隷積み出し港として栄えた港街、永い内戦から独立間もない戦禍の失せぬ国、国家分裂による戦禍の修復を着々と進める中世城郭都市。僅か160キロ先の超大国からの経済封鎖に喘ぎながらも自立にかける国、列強の植民地時代の搾取の影響を引きずっている国々、内戦、紛争から立ち直れずに困窮する国など、南北の経済格差の現実を如実に窺い知れる。これらの国々の人々の印象は貧しくも陽気で明るくプライドをもっており、現実を踏まえ懸命に生きようとする人達の優しく接してくれる姿勢には何度となく感激をさせられた。

これらの多くの国々には日本からのODA事業をよく見かける。不似合いなほど立派な港湾工事、僻地の道路のトンネル工事など、なぜここにと考えさせられるものが多く、その現場の立て看板に申し訳し程度の日丸とともに日本の大手ゼネコン名がやたら目に付き、なにか割りきれぬ気持ちにならざるを得ないものが多い。その反面、日本円が現地通貨に換金できるのは東南アジアとヨーロッパの一部であり、経済大国を自負する割に寂しい限りであり、これに反して米ドルは現金で通用する国も多く、世界全体の政治、経済、軍事面に与える冷戦後のアメリカのあまりにも大きな影響力が脅威に思えるとともに、地球全体に何か大きな軋みを感じざるを得なかったのは実感であった。この震源の地がリーダーの世代交代の迫っているパレスティナ、キューバでなければと考えていたが、まさか米国でのあの悲惨な事件になろうとは夢想だにできなかった。

船旅では改めて海の大きさと自然の美しさと不思議さに感動し驚嘆した。大海原に懸かる巨大な虹、天駆ける雷光、満天の星に一際南十字星。ケニヤの大地のライオン、象などの野生動物。イルカの群泳、鯨の親子、トビウオの乱舞、流れ藻のラッコ。地球環境汚染が進んだと言われるて居るが、見た目にはどこの海も青く美しく、地球の回帰能力に期待しながらも、このかけがいのない星に棲む全ての地球家族のために早急な地球規模の対応策を願わずにはいられない。

この船旅では多くの人々と触れ合うことが出来た。地雷除去活動、国境なき医師団員、災害支援、人道問題、環境対策のボランティア活動で活躍する人、各国の時事問題の専門インストラクター。報道、海上保安庁などで貴重な経験を積んだ人々、額に汗し船内ボランティアに徹し、寄港地で交流を努める若者たちなどから実に多くのことを教えられ、今も親しく船友としてお付き合い出来る事は大変嬉しく思っている。

この旅で知り得た情報、経験を活かし些かでもミカの会の活動にお役立ちできるよう努めていきたいと考えている。

船上からはEメール、衛星電話、FAXなどで会の皆さんをはじめラマさんとも情報交換をすることが出来た。特に加藤副会長を介してのメール交換は情報不足の船上においては大変に心強いものであった。改めてご厚意に感謝します。

### 事務局会計からの報告

#### バザー収支報告書

名 称：2001チャリティ・コンサート&バザー

日 時：平成13年12月16日（日）

場 所：まちなかの駅ポッポまちだ・屋外広場

担当者名：坂・中野・沼野

摘 要	収 入	支 出	収 益
募金箱	9,820		
民芸品・チャイ売上	40,100		
カップケーキ売上	6,500		
バザー品売上	42,650		
バザー用品送料3個		4,110	
カセットボンベ		204	
チャイ用牛乳		1,663	
参加団体出店料受入	15,000		
経費援助 世羅美庵	13,405		
高原書店	11,400		
会場・設備備品使用料		25,305	
コンサート出演者謝礼		35,000	
合 計	138,875	68,282	70,593

協力者名：斎藤（謹）・高原・今村（旭）・今村（和）・大谷・和田・松浦・斎藤

(美) 青沼・加藤(末)・加藤(雅)・掛川・小林(一)・小林(公)・福田・井上  
(啓) 片岡・後藤・斎藤(礼)・佐々木

- \* 民芸品・バザー品・カップケーキのご寄付有り難うございました。
- \* アフガン募金26,709円はそのままアフガニスタン人権協会へ寄贈しました。

会員以外で支援金募金を頂いた方のお名前 (12/1 12/31)

石田 一江・志野 昌・水澤 \_・蔭山 士・秋月 英美・吉野 敏

(敬称略)

会員以外で品物をご寄付頂いた方のお名前 (12/1 12/31)

井上 淑子・高橋 温子・河野(藤の台団地)・新庄 洋子・八丈 紀子  
羽深 篤子

(敬称略)

#### 【編集後記】

年末号、新年号と忙しい時間を過ごしました。素晴らしい事に原稿入稿の半分以上はメールにより送られて来ました。編集の作業の飛躍的な簡素化に続がります。以前より提案しておりますように電子メール、ホームページの閲覧は費用の節約、スピード、記録どれをとっても圧倒的に有利であり欠かせないものになりつつあります。ミカの会の会員の皆様是非おそれず挑戦してみてください。国際ボランティア祭夢広場のホームページの企画が進んでおります。町田市内のボランティア活動を網羅し、活動の支援を少しでも出来るよう頑張っております。

ミカの会のホームページ共々宜しくお願い致します。

<http://www.jedi.co.jp/mika>